

きょうも机にあの子がいない

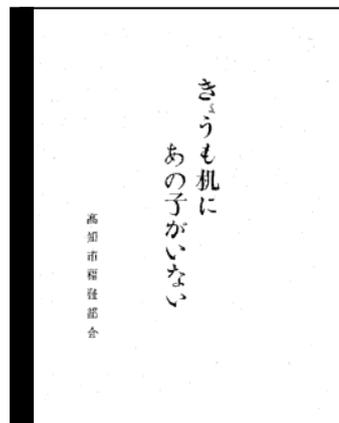
—福祉教員の実践に学ぶ—

「きょうも机にあの子がいない」

これは 1950(昭和 25)年に長欠・不就学対策として全国で初めて高知県に配置された福祉教員の苦闘の記録から生まれた言葉です。終戦直後の混乱期、日本には貧困ゆえに学校に行けない子どもたちが数多くいました。そうした子どもたちの家庭を昼夜の別なく訪問し、子どもたちや保護者・地域に寄り添い、粘り強く関わり続けた福祉教員たちの姿は、教育者として忘れてはならないものを私たちに教えてくれているのではないのでしょうか。

当時と現在では、社会情勢や子どもたちの生活環境も大きく変わっていますが、手さぐりとも言える福祉教員の地道な取り組みと教育に込められた情熱は、その実践記録『きょうも机にあの子がいない』からもしっかりと伝わってきます。

今回はその一部を抜粋し、紹介します。(表記は原文のまま)



<当時のガリ版刷りの表紙>
1954(昭和 29)年 5 月出版

このように休む児童に対して、担任としての責任は感じていても、あの子もこの子もと思う時、どれ程の事が出来るであろうか。一人の子供の為に多くの子供の廃れて行く事のないようにする為には……。

せめてもう少し子どもの数でも少なければとは、教師の願いではないだろうか。

けれども私達は日常の実践を忘れてはならない。一人一人の子供を見つめ、一人一人の子供の持つ問題をはっきりと認め、問題解決に当らなければならない。

その為には家庭訪問が最も必要である。私達はこのような家庭の真の理解者となり、より親しく話せる人となるべきであろう。



“休むと言いだしたら、父でも出す事が出来ない”強情と、“無口で元気のない”学習態度とは、どう理解すべきであろうか。“自転車に乗せて登校しても、すぐ逃げ帰ってしまう”程、なぜ学校が嫌いなのか。一人一人の子供の持つ問題を、はっきり認識して指導に当たってもらいたいと企図する福祉教員の意図をくんでももらいたい。文字の読めない両親には、このような貧困と混乱を打開する力は期すべくもない。姉と兄は長欠不就学に終わった。そして父母の生涯と同じ道を歩んでいるであろう。しかし弟達はともかくも学校に出ている。教師達が九ヵ年の期間に於て、この子供の魂の中に、何物も与え得ないとしたら、一体教育とは何であるのか。“このような家庭の真の理解者”となるべきであるというわれわれの言葉は、この家庭の理解を通じて、このような家庭を生み出し、更に将来も生み続ける社会を認識し、その上に立った教育の課題を、具体的に展開実践することを願っているのである。

福祉教育ということばを、正しく理解されている先生は、未だ極めて数少ないと思います。私達はこのことばが、教育に関するあらゆる理論の基底に考えられなければならないと思っているのです。どのような教科を教えるにしても、先づその子供達の生活がどんな状態であるのかを知らなくては、意味をなさないのだと思います。若し先生方が、担当学級の子供達の生活状態を本当に知ったら、現在多くの本に書かれている、或は多くの学校で行われている教育の前に、もう一つ是非しなくてはならない、大切な仕事がある事が判るはずでです。この大事な事を放っておいて、どうして本当の教育が出来るのでしょうか。教育に於て真実なるものは教科の伝統ではないと、先人の言葉を引いて、開き直って言う分際ではありませんが、実際にはあまりにも多くの教室が空転しているし、あまりにも多くの子供達がとり残されてゆきつゝある事を、私達は毎日見てそして知っているのです。

また、この取り組みの記録を残した一人である水田精喜さんは、のちに当時を振り返って次のように述べています。

この時代のわたしたちはまだ未熟であった。記録のあちこちにもこんな言葉が出て来る。

親の無理解

本人の怠惰、学校嫌い、ずる休み

義務教育論議、等々

「社会の矛盾」「政治の貧困」などとは口では言いながら、ことに当たってはこの程度の認識しかなく、効果のないことをなげくのがしばしばであった。そして頼るところは効果のない教育委員会の呼出状という権威であり、児童相談所であり、時には警察であり、鑑別所であった。これは同和教育まで至らなかった福祉教育の時代のとりくみの実相であったといえる。欠席一学力のおくれ一欠席一をくりかえす中で、時には非行に走り、学級のなかまから疎外されるなかで学校嫌いといわれるようになり、ついには長欠となっていく。最も頼らなくてはならないところはお役所ではなくて実は「学級集団」であったのである。わたしたち福祉教員の手はまだそこまでのびていなかった。

しかし、わたしたちは少しずつ前に進む。やがてわたしたち福祉部会はこんなことを言いはじめた。

「福祉教員の仕事の目的は福祉教員をなくすことである」というのである。福祉教員のいまやっている仕事はもともと学級担任の仕事である。子どもを知り、家庭を知り、その信頼関係の中でこそ本当の教育ができる。教育の出発点にかかわる大切なことが福祉教員のうけ負いではいけないのではないか。そういうあたり前のことをこんなことばであらわしたのである。



今から 50 年以上も前の記録ですが、現在の私たちの実践の中にも当てはまる言葉がたくさんあるように感じられます。